

川下

誰が優秀かわからない。三人とも事情をよく分かっている風で、私に納得するよう迫ってくる。テーブルの上には丈夫そうなラザニア。「あなたの言いたいことは分かった」と3日続けて言われたときから、私は母のことを理解しようとしなくなった。去年、この姿勢に留まるわけを姉に説明するのもやめた。テーブルの下にはギンが写っている。いまは父としか連絡を取らなくなってしまったけど、それでも私たち4人は未だに、この写真の時と変わらず、黄色い家族なんだろう。シルク混の綿の靴下で角の取れた私の足は、ラタンの上に横たわっている。居心地は今ひとつのようにも見える。ラタンのラグは4万円だった。この半年で一番思い切った買い物。外が急に暗くなった。誰がということもない。「分かりやすいな」はいつも侮辱だ。すでに見たものに見えるならそれは慢心に違いない。スポンジが一瞬で泡立ったように感じたが、それは事実だった。この平皿は、出番のない実家からわたしが持ち出してきたものだ。大きすぎて、平らすぎる。いつもまさかの場面で使っては、ざっと洗う。